日本医史学雑誌　第68巻第1号（2022）　72–75

正倉院文書の「茶」の字は茶か

梅木　春幸

京都府宇治市

天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』に「茶廿束　直十四文」[1]という記載がある．この「茶」の字はお茶のことであろうか．

まず，「茶」の字義についてであるが，張名揚氏は顧炎武（1613～1681）『唐韻正』巻四「茶」の条の「愚游泰山岱嶽，観覧唐碑．題名見大暦十四年刻荼薬字，貞元十四年刻荼宴字．皆作茶」という件を引き，大暦十四年（779年），貞元十四年（798年）のお茶に関わる思われる語彙が「茶」となっている旨指摘し，さらに，656年に高宗と武后が孝敬太子の病気治癒を祈願して建立し，後の847年に「福寿寺」と改名された西明寺から両側にそれぞれ「西明寺」，「石茶碾」と銘のある石製茶碾（図1）が出土したことを指摘し，「前掲顧炎武の説と「西明寺石茶碾」といった例証を併せて見れば，この時期の密教僧が接したチャは「茶」称されていた可能性が高い．」と論述する[2]．

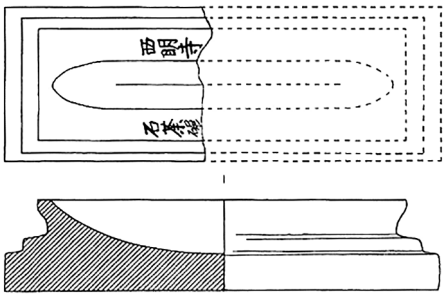

図1　西明寺遺跡出土石茶碾[3]

ということは天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「茶」の字はお茶のことかと言えばそう単純ではない．徐静波氏[4]や高橋忠彦氏[5]によれば「茶」は元々苦菜を現わす字であり，高橋氏によれば「同じく苦味を持ったツバキ科の茶に転用されたものであろう」[6]としている．

つまり，「茶」の字の意味は元々「苦菜」であり，後から「茶」の意味が付け加わったのである．

そうすると，天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「茶」の字をお茶のことと断定することはできない．

そこで，まず日本における「茶」それと現在お茶を意味する「茶」の字の使われ方の歴史について見ていく．

高松政雄氏は「日本では，まず和名抄（元和古活字本）に，

茶茗　字亦作檫

とあるが，写本の伊勢本では，この「茶」は「茶」の字形を採る．名義抄（観知院本）も，「茶」で掲出する．ところが，金光明最勝王経音義では「茶（上声音）陀音　又作茶」と字形は「茶」の方で見える．

さらに同書の後筆書入れには，「茶」の字形もある．」とし，「ここでは既に「茶」「茶」が混沌している」と論述する[7]．そして，高松氏によれば，飲むお茶の意味ではっきりと「茶」で定着する最初は平安末期の『色葉字類抄』である[8]．

となると，天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「茶」がお茶を指していたとしても文字の意味からすれば別段不思議ではない．

ここで問題となるのは日本でいつ頃から喫茶文化があったかである．781年～806年頃のものと考えられる山城国府跡から当時の茶道具と思われる緑釉陶器釜，火舎，椀が出土している[9]ことから781年～806年頃には既に喫茶文化が存在

したことになる．そうすると，そこから多めに見積もって67年程しか時代を遡らない天平十一年（739年）に喫茶文化が存在していた可能性は大いにあると考えられる．

しかし，天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「荼」をお茶のことと断定するには大きな問題がある．

それはまず数量単位が「束」となっていることである．また，「水菜卅一束　直銭五十六文」と記載されるように，他の野菜より明らかに「荼」が安いことである．徐静波氏はこのことを指摘し，「ここの荼は明らかにお茶ではないことがわかる．おそらくこれは中国初期の「荼」とは同じ意味で，ある種の苦菜をさすであろう．」[10] と論述する．一方で中村羊一郎氏は「次の理由から筆者は茶である可能性が高いと考えている．ひとつは，後述する番茶の一種に茶の枝を鎌で切って束ね，縄で軒先につるして陰干しにするという単純な製法があることで，もしこの方法なら枝のまま束ねておくこともできるし，葉のみを集めて容器に保存することも可能であるからである．また岩間眞知子によると，苦菜には「選」という別称があり，センは『茶経』，があげている樌（か），葭（せつ），茗（めい），荈（せん）のうちセンに通じるものであるので，選はセンという音と通じて「せん」と同義となると述べており，逆の立場から奈良時代資料の茶が茶である可能性を考えさせてくれる．」[11] とし，右番茶については「鳥取砂丘の近くを通って鳥取の市街地に入り，同市の南西に位置する同県気高郡鹿野町鬼入道（きにゅうどう）では，十月末に茶の木を鎌で一尺くらいに切って縄で編んで軒下に吊るす．乾いてから三センチほどに切って保存し，飲むときには妙って煮だす．」という製法の番茶[12]，鳥取県東伯郡三朝町穴鴨の「十月に枝を五〇センチくらいの長さに刈り取り，縄で中央を編んで軒下に吊るしておき，正月前に押切で切り大きな鍋で妙ってから保管しておく．なお一年分を一度に処理せず，枝に葉を付けたまま新聞紙にくるんで保管しておいて必要なときに妙る」製法の番茶[13] 等の例を出す．

もし天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「荼」が中村氏の言う「茶の枝を鎌で切って束ね，縄で軒先につるして陰干しにする」番茶のことを指すのであれば数量単位が「束」となっていることも他の野菜より価格が安いことも別段不思議ではない．

では，こういった番茶はいつ頃から存在したのであろうか．中村氏は狂言「煎物売」に登場する洛中の茶売りの売り文句「お煎じ物・お煎じ物，陳皮・乾薑・甘草加えて煎じたる煎じ物召せ」や狂言「今神明」の「天道干し」の茶を客に供したため評判を落とす件を引き，室町時代には番茶又はそれに類する茶が存在したと論述する[14]．さらに，伊藤うめの氏は茶種が縄文式晩期の真福寺（現岩槻市）の泥炭遺跡から発見されていることを根拠に，茶が大陸より伝来したものとしても「自然的な伝播によって埼玉県まで東漸するには可成の日数を要すると考えられ，西部の針葉樹林地帯では可成早くから存在していたことになる．又，短期間に埼玉県まで伝播したとすれば，人為的な運搬が考えられ，当時の日本列島で茶樹が栽培されていた可能性が強くなる．」[15] とし，さらに同氏は日本の茶樹が「三世紀前半に呉人によって江南又は台湾産茶樹が南九州にもたらされた植栽されたのが始まりである，と推定すると，南九州で植栽された茶樹は黒潮を利用すれば沿岸地域への東進は容易に達成でき，埼玉県への茶樹伝播も短期間で達成できる．従って，埼玉県地方における茶樹伝播時期は，前述の真福寺遺跡における考古学的研究結果と合致する．この合致は上述の推定の妥当性を裏付けている．」[16] と論述している．

伊藤氏の言うように三世紀前半に茶樹が日本に存在していたとすると，そこから約500年経った天平十一年（739年）に中国の喫茶文化と別系統の日本土着の喫茶文化，則ち中村氏が言うような茶の枝を鎌で切って束ね，縄で軒先につるして陰干し又は日干しにする番茶が存在しても何ら不思議はない．ただ，伊藤氏によれば，右の三世紀前半に日本に入ってきた茶樹は中国三国時代の呉人がその勢力範囲のタイ，ビルマ方面の特殊発酵茶とともに伝えたものである[17]．そして，同地で現在作られている特殊発酵茶は「ミアン」[18] 或いは

「ニイエン」[19] といった「食べるお茶」である．さらに，守屋毅氏は「すくなくとも，今日たしかめられる範囲でいうかぎり，〈食べるお茶〉の歴史の中でそれは一貫して〈食べるお茶〉でありつづけた」[20] と述べており，ここから推察するに，東南アジアから伝わった特殊発酵茶＝「食べるお茶」が日本で飲むお茶に変わるには中国の「中原」と呼ばれる地域からの喫茶文化の流入を待たねばならなかったのではあるまいか．そうすると，「三世紀前半に茶樹が日本に流入したことを契機に日本人が相違工夫して中村氏が言うような茶の枝を鎌で切って束ね，縄で軒先につるして陰干し又は日干しにする番茶を天平十一年（739年）ごろまでに生み出した」という仮説は無理がある．

ただ，茶樹が三世紀にビルマ，タイ方面の特殊発酵茶とともに黒潮に乗って入ってきたとすると，天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「茶廿束　直十四文」の「茶」に別の可能性が出てくる．この「茶」が「ミアン」である可能性である．

ここで，中村羊一郎氏が紹介しているタイの「ミアン」の製法を引用する．

> 「刃物を指につけ，葉柄に茶葉の一部を残したまま，葉だけを1枚ずつ切り取る．そして，それらを丁寧に重ねて束ね，その小束のまま漬け込む．そして，製品はその形のまま仲買人へ売られる．仲買人は自家の工場で改めて漬け込み，出荷するときに真新しい竹ひごで束を作り直す．」[21]

このように，タイの「ミアン」の製法にも「束」にする工程があり，出荷する際も束にして出荷する．さらに，松下智氏が「タイ国の茶に関しては，近年になって中国式の緑茶をはじめ，ジャスミン茶，鳥竜茶まで造られる様になって来たが，伝統的な茶としては，噛み茶が広く知られている」[22] と述べていることからも，三世紀当時同地での茶は食べるお茶であった可能性が高い．また，前述のように781年～806年頃のものと考えられる山城国府跡から当時の茶道具と思われる緑釉陶器釜，火舎，椀が出土していることを踏まえると，『寫經司解』の「茶廿束　直十四文」が記載された天平十一年（739年）は「ミアン」等の「食べるお茶」と「飲むお茶」が混在していた可能性がある．そうすると，『寫經司解』の「茶廿束　直十四文」の「茶」は「ミアン」である可能性が出てくる．また，江戸時代において，また現在も日本の一部地域において茶が婚礼に欠かせないものとなっていること[23] とタイの揺族に婚礼に茶が欠かせない種族が存在すること[24] の類似性，愛知県西条市の石鎚黒茶[25]，徳島県の阿波番茶[26]，高地県大豊町の碁石茶[27] といった茶葉を漬け込む製茶方法が日本にも残っていることは日本人がかつてタイ等の方面から入ってきたであろうミアンを知り得た可能性を強化している．

以上のことから，拙稿では天平十一年（739年）八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』に「茶廿束　直十四問」の「茶」はタイやラオス等で今も製造される「ミエン」或いは「ミアン」と呼ばれる「食べるお茶」のことである可能性が高いと結論付ける．

参考文献および注

1）『大日本古文書編年之2』p一七九に所収

2）張名揚「「称名寺聖教」に見える「茶」と「茶」」（アジア遊学（252）：2020.9 p32–43（内当該記載はp33–35））

3）中国社会科学院考古研究所編著文物出版社発行『青龍寺与西明寺』p210より引用．同著では「西明寺遺址出土石茶碾」となっているが，張名揚氏は前掲論文文末脚注（1）において『青龍寺与西明寺』図版等を見るに「石茶碾」が適切であろうと述べており，拙稿も張名揚氏に倣う．

4）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/139407/1/edsy10_153.pdf　徐静波『中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来』「一、中国におけるお茶文化の始まり」の件

5）高橋忠彦「茶の五つの名：唐以前における茶の呼称について」（学芸国語国文学／東京学芸大学国語国文学会 編（48）：2016.3 p40–54　内当該記載はp40）

6）5に同じ

7）高松政雄著『日本漢字音の研究』p六九〇

8）7に同じ

9）https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=23392&file_id=22&file_no=1　寺本益英『古典作品に見るお茶の文化史：茶の伝来から茶道文化の

成立まで』「1. 茶の伝来」の件
10）https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/139407/1/edsy10_153.pdf　徐静波『中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来』「三、お茶文化の日本への初期伝来」の件
11）https://kanagawa-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=4422&file_id=18&file_no=2　中村羊一郎著『番茶の民俗学的研究』の「七史料に見る日本における茶の始まり」の「茶の史料上の初見」の件
12）11と同著の第一部　番茶製法の歴史と民俗　第一章番茶とは何か　第二節一地域内に共存する多様な番茶　縄で吊るす陰干し茶
13）12に同じ
14）中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p19–21
15）伊藤うめの「葉茶の飲用の歴史第一報　葉茶の飲用の起源について」（風俗：日本風俗史学会会誌　12（2）43）　1974　p18–37　内当該記載はp19）
16）前掲p32
17）前掲p31–32
18）中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p189–191
19）布目潮渢著岩波現代文庫発行『中国喫茶文化史』p20
20）守屋毅著淡交社発行『喫茶の文明史』p43
21）18に同じ
22）https://core.ac.uk/download/pdf/56629867.pdf　松下智著『〈論文〉東南アジア大陸諸民族と茶の文化：檳榔との比較民族学的研究』一．苗・璃語族の茶の（2）東南アジアの瑠族「タイの瑠族と茶」の件
23）中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p102–107
24）22に同じ
25）中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p42–45
26）中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p45–48
27）橋本実著株式会社悠飛社発行『お茶の謎を探る』p43